

# Graded Direct Method Association of Japan

News Bulletin

第29号

## 英語教授法通信

1977年5月20日

---

編集・発行・GDM英語教授法研究会 事務局 〒154 東京都世田谷区豪徳寺2-27-19 吉沢美穂方 TEL.(429) 5929

---

## Communication の “Roots”

升川 潔

Alex Haley の Roots が最近話題を呼んでいて、2月14日号のタイム誌がこの特集をしている。作者の identity 追求の仕事として、黒人としての自分の祖先を探って行くことを思い立ち、アメリカから更に祖先を求めて、祖先が奴隷にさせられたアフリカにまで足をのぼす。この草の根指向は、その底流にあった「原点に返れ」精神と一つになって、ブームを呼んでいるようである。

GDMの洗礼をうけてからもう20年近くになり、GDMやBasicのことが自分なりに判ったつもりでいると、時々足をすくわれる。例えば、ある人から少しはずれるよと注意をうける。ふと考えてみると、EPからとび出して余計な語源の説明をしたり、別の表現をつい入れてしまって授業をしている自分に気づく。そんな時は、もう一度20年前の白紙の状態に自分をおいて、EP1ページから新しいEPを使って、最初の時の気持をとり戻そうとする。絵も新しく書いてみる。

最近2月の月例会で和久山さんの Demonstration を経験した。Make-believe のクラスであったことを割引しても、例の夏のセミナーの外国語 through Pictures と同じように、初めてGDMに出会った時のような感じがよみがえって来た。そんなに色々な品物を出したわけではないし、絵を沢山使ったわけではない。Bag と bottle と box といったEPの中ではごくありふれた材料を使って、see の練習をしたのだが、一つの SEN-SIT が次々に saw, did not see, will see の中で生かされていて、しかもEPからはみでていなかった。彼女はGDM2年生（だったと思う）なのだが、生徒である我々に考えさせ、自発的な発言をひき出し、「あっそうか」の実感を我々に与えてくれた。（もう少しわしくは関東支部ニュース3月号を見て下さい）

3年ばかり前の六甲セミナーでも、何年ぶりかで、片桐ユズルさんが第1時間目の I, You を導入する Demonstration を見た。（生徒はその時に初めて集められた六甲の小学生だった。）その時も初めてGDMに出会った時のような感じがあった。それが何であるか考えてみたら、彼が

実際の場面 (live situation) → 文字と live な場面の結び合せ → 文字だけ、というプロセスを  
実にスムーズに結びつけていたことだった。これも GDM の Roots であった。

若い人とかベテランと呼ばれる人とかに拘らず、実際に生徒を E P で教えて 1, 2 度経験してからが一番「危険な季節」に入るといえる。自動車の免許をとった時、3 ヶ月目、1 年目、3 年目は事故に注意しろといわれたことがあったが、それは運転になれて自信もつ時期 - 安心する時期だからだろう。GDM も又しかりである。「あ、時計のことか、この前にうまくいったから、同じようにやっつけばいいや」と思っていると、さにあらず、意外に生徒はのってこないで、教師の方ばかりが伝えようとしてあせり、生徒には伝わらない。こちらが新鮮なエネルギーをもっている時だけ、伝えようとしなくても、自然に伝わるものだ。

GDM は、教師の一方通行をやめて、こちらも伝え、生徒からも自発的発表をひき出すところに「草の根」があって、この相互通行を認めるところに、教師が圧倒せず一方的に記憶をおしつけない GDM の良さがある。だいたい、communication というものは、一方だけが圧倒的な力で「お前は記憶できないから 1 だ、2 だ」ときめつけるものではない。お互いの間に知り得たことを交換し合うところに成立つものであるはずである。GDM が英語という外国語を媒介として、教室で作っている世界は、communication の原型となるはずである。だから教師の一方通行になったら、GDM ではなくなる。自戒を含めていうと、communication として伝わるためには、教師が新鮮なエネルギーをたえず原点に戻って補給し続けなければならない。

## NEWS news

- ★愛知県の三河湾の玄関口、佐久島へキャラバン隊行く。6月25日～27日、佐久島中学校に勤務している蜂須賀さんのところへ関東支部の升川・山田・箕田・島・天野武・津谷・内田・田幸・豊川の9名が訪問。升川さんが1年生に Demonstration を行なった。カニや魚をあきる程食べた。中学校に図書を寄贈した。蜂須賀さん・園さんどうも有難う。
- ★千葉 Y M C A で戸田 (旧姓北国) さんが、また、立川 Y M C A で高野真理子さんが、小学生に GDM で教えている。pioneer 精神で行なっている。
- ★鎌倉グループでは、鎌倉婦人子供会館 (Tel 0467-22-0507) で、定期的に Teachers' training を行なっている。
- ★東京近辺で、GDM で教えている主な学校は、区立赤坂中学校、区立小松川第4中学校、都立羽田工業高校、千葉大付属中学校、国立音楽大付属小学校、聖ドミニコ学園小学校、東星学園などです。その他、学校以外のところでは、朝日カルチャーセンター、東京 Y W C A、横浜アカデミー、横浜 Y M C A、鎌倉婦人子供会館、文恵高等看護学院など。
- ★第20回 公開講演会 6月11日(土)午後2時15分～5時 東京 Y W C A 講堂で行なう。  
実演授業：港区立赤坂中学校1年 Tense の導入、指導 箕田兵衛 講演：GDM と教科書教材の接点 根古谷常雄 司会 足立区立第14中学校 田幸 徹

## 島に理想的な英語教育を求めて

佐久島中学校 蜂須賀 正 男

愛知県の三河湾のちょうど真中に浮かんでいる島、それが佐久島です。海の幸の宝庫であるが、時代の波に押され過疎化が激しく、100人を超える人口が現在では700人そこそこである。島民は自然と共に生活し、時には苦労を味わい、時には楽しさを満喫している。

私は1974年に新任でこの島へ来た。今でも船から一步足を踏み出し歩いた時の潮の香り、干されたワカメの光景を思い出す。情熱に燃え、ぜひここで理想的な英語教育をやるうと決心していた。

18名の一年生に、GDM的に英語を教えたら、生徒はすぐのってきた。放課後でも、廊下でも“*This is~.*”が聞こえる日々が続いた。このことは、英語だけでなく、一度早口ことばを教えたら、隣の小学校の児童まで口ずさむようになり驚いてしまった。一度、“*Beautiful Sunday*”を教えると給食の音楽がいつもそのオンパレードになってしまう始末。EPの30ページぐらいまでを済ませ、*New Horizon*に入った。楽しい、実に楽しい。しかし、テスト、それも統一テストになるとかんばしくなかった。もちろん、そのための授業をやったわけではないのだから、そうなったのだろう。書くことを家庭学習に任せ徹底しなかった、ダイレクトのため誤解がつみ重なってしまった、その二点が反省された。

その生徒は今三年生。そして私が担任である。受験期を控えた現在グループで下宿を使い勉強させている。今となっては絶対に志望校へ入学することをめざしがんばっている。親も本人もますます人口減少になることを知

りながら進学をめざしている。ここに苦悩がある。

理想を求め、毎年GDMとの関係を変えて来た。妥協して来たと言うべきかもしれない。教科書との関係を調べ、EPをより少なくしまた日本語使用を実行して来た。今の二年生で、家で勉強を全くせず、海と遊んでばかりいる女の子がいる。He wants to learn how to ride a horse. を訳させようとしてhorseの意味を聞いたら、初め「あの水道に使うホース」と言い、そして「何かをほ〜す」と言った。少人数なのでいつも手をかけている子だが、冗談ではなく真剣にそういうことを言う。

島の子は、英語の環境は全くない。英語を学ぶ必要性を「入試科目にあるから」ぐらいしか見い出せない。家では、親の目からかなり自由でテレビを見ている場合が多い。これは職業がら、両親が早く寝て夜中に漁へ出て行ったりし、家庭のだんらんどころではないからである。しかし、素直な子が多く真面目であるから、宿題などはよくやってくる。

楽しいこととして、三年生の教材の“*a letter in a bottle*”をまね、実際に英文手紙を書き海に投げ入れたり、英語だけしか話してはいけない散歩や浜歩きがある。面接を英語でやることもある。

だから、私の授業は、「楽しい」とか「わかる」授業と言われるが、私としては「身につく授業」として行きたい。

# GDM and I : Reflections of a Foreign Teacher

Mike Cox

I have been asked to write about my feelings about teaching English using GDM. I wish to emphasize here at the outset that the following comments are meant to be taken as just that: feelings. Many of these observations are impressions only, for they are made on the basis of very limited experience gained through teaching only elementary fifth and sixth graders at the YMCA and on observation of demonstrations of similar classes held elsewhere.

First of all, in the GDM classroom I don't feel that my being a native speaker of English particularly offers any more advantages to my students than they would get if they were being taught by a Japanese, except perhaps for pronunciation in the introductory phases. Order, content, and the method of dealing with, the material is already set. Teaching in sense units is important, however; and to a native speaker, introducing, practicing, and reading the material in such sense units comes perhaps more natural than to Japanese instructors. Given that instructors have sufficient proficiency in English to enable them to instinctively feel and act using these units in the classroom and to pronounce them reasonably correctly, whether the teacher is a native speaker or not doesn't seem to me to matter very much.

Secondly, teaching according to GDM requires conscientious dedication. Introducing new concepts unambiguously necessitates considerable preparation, both mental and physical. Planning each lesson as to that day's procedure, time allocation for each part of the lesson, and then assembling the required materials means that a teacher can't just arrive ten or fifteen minutes before class begins and expect to succeed with his students. Thus, through teaching under GDM, I have become aware of the responsibilities of a good teacher.

I find myself looking forward to teaching each lesson, because I enjoy being with my students, this year fifth graders. This is partly because they are children and teaching children is a joy to me, but it's also because watching them suddenly grasp a concept and express it for the first time is very rewarding personally. That feeling of "Aha!" is a precious and meaningful one, one that even as adults we should constantly be striving to experience as frequently as possible.

I sometimes get depressed when my students don't respond—I am often confused as well, since I don't know whether they are unresponsive because of inadequate understanding of the lesson, or because they are hung-up over the fact that their teacher is a foreigner and therefore inscrutable at times. I have been working hard to create a classroom atmosphere in which the students can feel that they may say anything at anytime without fear of mistakes or disapproval from me.

I find myself in disagreement with some of the English in ETP and avoid using it with my students. One example of this would be the “This is the thumb.” “These are the fingers.” section on page 10 of Book I. I don't see any necessity or desirability here for employing two new words, “thumb” and “fingers”, in order to introduce still another third word “the”. Since these two content words do not reappear until pages 48 and 43 respectively, the concept of “the” as introduced here could be just as easily introduced using “the floor” and “the walls”, for example, both of which re-occur soon after anyway. Similarly, introducing the function word “after” in such an abstract context as “We put question marks after questions.”(p.30)is unacceptable to me. “We put a question mark here” (pointing to the end of the question sentence or using an arrow in the case of worksheets) fulfills the same purpose, that is, teaching the students how to write questions. Finally, the seldomused “What is the time?” rubs me the wrong way. To me, naturalness should not be sacrificed to convenience, in this case GDM's convenience, and “What time is it?” is not impossible for students to grasp, since “it” is used frequently throughout preceding lessons. I sense that the more abstract the concept, the more difficult it would become to teach it “directly” in the classroom using GDM. This problem deserves considerable deliberation on the part of all concerned with GDM.

My final feeling about teaching via GDM is that, in its being graded and the material being frequently reinforced, it is very well suited to teaching children but that its very gradedness makes it rather unsuitable and/or inadequate for teaching adults who can only come to class twice a week for one and a half or two hours. To remain stimulating and intellectually satisfying for adults it would have to be taught on an intensive basis, say every day for an hour or two. Otherwise, I think, the pace would seem too slow. I'm not too dogmatic on this point, though, as I've yet to see an adult class run according to GDM. These, then, for whatever they're worth, are the thoughts of one GDM English teacher—a somewhat restless native.

## GDM IN NAGOYA

Naomi Saito

名古屋でのGDMは、今年で南山Yが6年目、名古屋Yが5年目になる。「石の上にも3年」の時期はとくに過ぎたのに、毎年新年度のたび講師の入れ替りが激しいのが悩みのタネ。それでも生き残り組によろやくGDM歴3年目、4年目の講師が出てきた。また一方では、セミナーやトレーニングの機会には参加してくれる現役引退講師との交流が続いている。年2回3月と11月にGDM名古屋セミナーを行い、毎回20人近い参加者の内には中学、高校の先生方も多い。昨年3月セミナー参加者への after care と新人講師のトレーニングを兼ねて始めた月1回(第3土曜日)のBrush Up Trainingは、人数は少いが毎回外部からの熱心な参加者をえてE P p. 1からp. 65まですすみ1年を迎えた。月1回(第3金曜日)の勉強会は、Book reportで、去年の11月からLearning Basic Englishを

読み始め次回2月にはChapter 3にすすむ。以前にBEのoperations とdirectives の root senseとそれがEPの中でどのように広げられているか調べたことが、BEを理解するため又、実際の授業の上でも役に立っているの、adviser なくLBEを読んでいくのは難しいが、苦勞して読むだけBEの働きがよくつかめると思い頑張っている。新年度については、例年通り4年生から募集し、名古屋Y、南山Yとも新規のクラスに各学年2クラスを予定。継続クラスは2課程、3課程のクラスが2クラスずつできる予定。南山Yでは74年度より学年に関係なく3年間のコースであるため3課程に中学生のクラスもある。4月から休職していた寺沢さんの復帰もあり、山田さん、山中さんらOB講師の協力をえて名古屋GDMはまた新しい年へと前進。

# English

## Through Pictures

SBS (株) スクールブックサービス

〒160 東京都新宿区高田馬場1-26-5

F I ビル 4階

電話 03-200-4531

Textbook I with 1st workbook	650円
Textbook II with 2nd workbook	650円
Textbook III	650円
Recording Series I and II (set)	
— For textbook I and II 該当 —	10,000円
Film strips I	15,000円

## GDMと小学校英語

早坂 良子

今では東京の私立小学校でも英語を教えている学校は50校近くあると思いますが私の勤務している国立音大附属小学校が昭和28年に創立された頃は小学校の外国語教育はそう多くはなかったと思います。その音小で英語を教える事になり、私は中高の英語は経験もあり見当がついたのですが小学校の英語となると暗中模索で、遥かな自分の小学生時代を思い出したりしても、教えられる方と教える方では全く異なるので教材にも方法にも苦勞し乍ら数年過ぎました。6才から12才までの子供達に一貫して年令に適した内容と方法で語学教育をする事は難かしい事でした。そんな時Kさんに出逢いGDMの事を聞かされ、私はハッとする思いでルーテル学校の一週間の講習に出席しました。果して語いについても、gradingについても、situationについても、methodについても本当に私の困っていた事に対して明確な回答を与えられました。成蹊小学校で伊木英子先生の授業を見せて頂いた事もGDMをとりいれる事を私に決心させた事の一つでした。ただ何学年からGDMで教えるかという事は問題でしたが結局少し早いとも御批判を受けるかも知れませんが2年から始める事にしました。昭和34年以来実施しております。

クラス編成、時間配当、カリキュラム等に

ついて大体をお知らせ致しましょう。クラス編成は1.2年1学級26名乃至28名、3年以上40名、但し3年は英語の時だけ20名ずつに分れます。授業時間は1年20分週3回、2年20分2回、40分1回、3年以上は40分2回です。カリキュラムは1年はGDMではないのですがその事を頭に置いて発音中心に歌やゲーム易しいclassroom English, finger play等を教えます。2年でGDMに入り、I, Youから初め1学期でETP p.7まで、2学期にThis is Tom. でThis, That, Tom's からhis, parts of bodyで所有格に馴れ身の廻りの所有物に及ぼし、My name is \_\_. その後a, anを出し形容詞long, short, big, smallで3年に入り始めてETPを持たせませす。2年はExerciseを含めたプリントでやっています。3年からはETPの頁によって記せば次の順序になります。 p.10, p.17, p.13, p.24, pp.11, ~13, pp.22~23, p.18, pp.25~27, p.30, pp.35~36, 即ち2.3年はBe動詞文で通します。4年は pp.28~29(go), pp.37~39, pp.19~20(give), pp.14~16(take, put) p.21, 5年は pp.40~55, 6年は pp.58~90です。頁数では本当に少ないのですがGDMで育った子供達は真のThinking in Englishの良い言語習慣がついて行くものと信じます。中学でこれが受継がれないのは残念ですが昨夏の御殿場のセミナーに中学担当のK氏が参加された事はGDMに対して、(即ち小学校の英語に対して)理解を深めて頂いた事と喜んでいきます。

### —— ニュース にゅうず ——

- ★神戸でGDMをはじめて学ぶ人のためのセミナー(1976年10月9日~11月6日)が行なわれた。
- ★Joint Meeting(1月22日~23日)を名古屋で行なった。総勢14名。「GDMの原点に戻って考えよう」ということが話しあわれた。
- ★六甲のSpring Seminar(3月27日~30日)が大阪YMCA六甲研修センターで行なわれた。参加者84名。自主プロでIrish, Korean, French, Russian, ChineseをGDMで行なわれた。

## ワタシハ、コトバガ、ワカラナイ……!!

(ペルーでの三ヶ月)

藤井 増子

ペルーで生活するなど考えた事もなかった私が、結婚して二日目、主人の出張先ペルーへ同行し、約100日間滞在することになりました。ペルーと言えばスペイン語、今までスペイン語と言えば、御殿場セミナーで片桐先生のクラスに顔を出して、「Yo!」「Usted!」をやっただけ…不安と言えば不安でしたが、結婚した勢い(?)で、ついでに飛び発ちました。飛行機の中でもSTPを開けてページ毎に「ウン!ウン!!解る」と自信(?)をつけたつもりでしたが……着いたその日から、私は言葉が全く通じない、まわりの人達が何をしゃべっているのか全くわからないという恐ろしい世界にいる自分を知って愕然としました。下宿では自炊生活でしたので、すぐ市場へ買物に出かけなければなりません。近くの道路脇に朝になるとインディオの人達が荷車に野菜、果物、魚、鶏、豆等売りに来るので、そこへ行く訳ですが、数字もよくわからず、相手が値段を言えば少し大きい札を渡しておつりをもらうといった具合、その内、数字に慣れてくると、気分も楽になり買物も楽しくなりました。そんなある日、花屋さんでバラを買おうと思い、手でこれが欲しいと示すと花屋のおばさんは、何やらしゃべる。わからない。それで、この花がとってもポニート! (きれい!) と全身で訴えてみるのだけど、そのおばさんは相変わらず何かしゃべる。そして他の花はどうかと示す。これでなければ要らない! と私は首を振る。おばさんは表情ひとつ変えずに又何か言い続ける。概してインディオの人達はその哀しい歴史のためか、表情が暗くてそして無表情。私はちっとも訳が

わからず嘆息。その時、隣りにいた小物売りのおじさんが突然、その花を両手で抱くようにしてこれは俺の花だよ…とゼスチャーで私に示してくれたのでありました。私は初めて、あー、そうなの! 売納済みだったの!! と合点出来たのでした。おばさんはニガ笑いをしてうなづいていました。『Si! Si!!』と言いながら帰ろうとする私の横から中年の白人のおばさんが、何やら言いながらやって来てそのバラを全部抱えて行ったのでした。すると小物屋のおじさんは首をすくめて私に笑いました。私は、おじさんの説明は本当によくわかったわと心をこめて、Gracias! と言いつつあのおじさんは何てセンスの良い人だろうと感心しました。何でもないことかも知れないけれど、言葉を使わずに、相手をこれだけ納得させるなんて……GDMのクラスで、ハッ成程!! と感動したのと同じ新鮮な喜びを感じました。

子供達と接する機会があると大ハッスルで何だか即席GDMクラスを作って、「Yosoy Masuko!」「Usted es \_\_\_\_\_」なんてやらかしては楽しみました。子供達は次々に名前を覚えてくれるので、次には、Eles \_\_\_\_\_! Ella es \_\_\_\_\_!! その内、Nosotros estamos aqui. (We are here.) Mi marido está alli. (My husband is there)と主人のいるらしい方向を示すまでエスカレート。でも子供達はとにかくスペイン語をしゃべっているぞと珍しかったのか、気持よく付き合ってくれました。

## 山梨YMC Aに於けるGDM

窪田しのぶ

山梨YがGDMを取り入れて4年になる。GDMだけで育ててきたクラスが中学2年に1クラスある。男の子ばかり9名のクラスで彼等は英語が好きで、学校の成績も良く、GDMのクラスも充分楽しんでる。教える私にとってもこのクラスは楽しい。4年過ぎた今、山梨YでGDMを進めていく上での問題点も、同時に幾つか現われてきている。山梨Yでは常に2名の外人専任講師をおき、1年ずつずらした2年交代のシステムをとっている。週2回のクラスの1回を外人講師、1回を日本人講師が教えている。最年少の4年生は、2回とも日本人講師が教えているので問題はないが、5年生以上のクラスでは両講師の綿密な打ち合わせが必要であり、授業の前の相当な準備も必要である。外人講師の中には、GDMを明確に捕え、適切な準備をして効果的にする人もいるが苦手な人もいる。もちろん日本人講師でも得手・不得手はあるが両講師が事前に話し合い、密接に連絡を取りあって、外国人(ネイティブ・スピーカー)である利点をGDMにどう生かして進めていくかがこれからの山梨Yの課題である。小学生のクラスは以上のことがらに留意して今後ともGDMを続けていく積りである。

問題は、中学生クラスである。中学生クラスは今、GDMと学校の教科書に分けられていて、GDMクラスは小学生からGDMを続けてきて、中学でも続けたいという子供達で構成される。このシステムでの問題点は、GDMクラスの生徒が次第に減っていくこと、

途中からは入れないという事である。先に述べた中2Cのクラスは、幸い始めた時の人数がかなり残っているクラスであるが、昨年12月他の塾に行く為1人やめて今9名である。Keepに入ってから今年の3月でEPIを終り、EPⅡに入りたいと考えているが、来学年は他の会話テキストを使用してはどうかという外人講師の意見があり目下その話し合いをしている所である。理由としてはGDMは語数が少なく、彼等はかなり話せるのだから易すぎるのではないかという事である。これに関しても話し合う余地は多いにあるし、またGDM講師の適性ということも考えねばならない。

### news にゆうず

- ★「英語・まちがいのすすめ」片桐エズル著 季節社 1500円
- ★「Graded Direct Method と教科書教材の接点」根古谷 常雄 GDM Publications 300円
- ★「意味の構造 — 成分分析」N. S. Brannen 監訳 升川 潔・沢登春仁訳 研究社 3000円
- ★“Basicの会”を毎月第4日(後後1時~4時)、神戸学生青年センターで行なっている。その他、研究会も開催している。連絡先 小高一夫

## movementとしてのGDM

田村美智子

1966年の春、大阪YMCAでGDMの実験クラスが作られた。対象は、小学生高学年である。この年は、私がここで中学生の英語のクラスを教えはじめた年なのだが、はじめてGDMの授業を見学した時のことは、今もありありとおぼえている。何か非常に不思議な気持ち。そして自分の目の前に、まぎれもなく新しい世界が開けてくるのを感じた。数人のmemberでGDM英語教授法研究会関西支部が生まれ、やがて私もGDMのクラスを持つことになった。

GDMは、ただひたすら面白かった。勉強会に出席したり、Basic Englishを読んだり教材を集めたり、毎日が充実していた。しかし、同時に私はとまどってもいたのだ。英語の授業は、英語を教えることを目的としているのだが、それにしても私の周辺が、あまりに英語の技術で満ちあふれていることは、なんとしても納得出来ないことだった。大人のクラスはともかく、小学生、中学生の場合ももっと他の要素が必要なのではないだろうか？こういう思いが、いつも心の底でうごめいていた。それが一体何なのか、ずい分ながい間分からないまま、GDMに熱中していた。関西支部の雑務も少しずつふえてきた。

北川民次の「絵を描く子供たち」、「子ども絵と教育」を読んだ時、かなりのことが明確になってきた。私はこの時はじめて、教育ということばにぶつかったのだ。教育とはこういうことなのか。そうなのだ。ながい間納得出来ないでいたことは、これだったのだ。教育という部分が欠落しているのだ。私は、自分でも気づかないまま、GDMを実践することによって、「教育」を目指そうとしていたのではないだろうか？私の意識の中

に、改めて教育ということが位置をしめはじめた。関西支部の中でも、同じような動きがあった。例会のテーマはほとんどは、「教育」だった。この動きは、少しずつ大きく広がってゆくように思えた。GDMは、movementだと思った。

movementは、自分の周辺から固めるべきだと考えた。周辺を固めつつ、少しずつ輪を拡げてゆこう。YMCAは、その体制として非常勤講師が圧倒的に多い。そして、意識はややもすれば、アルバイト的傾向に流れやすくなる。こういう状況の中で、teamをかためるにはどうすればいいのだろうか？YMCAも、movementであるわけだ。YMCAのmemberとしても、なんとかteamをかためたい。この時齊藤喜博に出会ったことは、非常に大きい。彼の教育思想には疑問を感じるが、team work,あるいはgroup workを進める具体的な方法論を、彼から学ぶことが出来たのは幸運だった。10年間、私はやった。獲得したものも少なくない。そして今、私の中に、movementとしてのGDMはない。投げ出してしまったのだ。

それにしてもGDMは、今も充分魅力的だ。10年前の、あの燃えあがるような情熱はかたちをかえて、より深く、ずっしりと私の心にある。今日、私のクラスでは、What is in this box?をした。大きな箱に、ウィスキーのびんを入れてふたをしめる。両手に持って振ると、中でコトコト音がする。「何が入っているのかな？」1人の子供がかけよって来て、箱の重さを調べはじめると、僕も、僕もとクラス中がわきたってくる。彼等は、好奇心をむき出しにして知りたがる。こういう時にこそ、What is in this box?ということばが生まれるのだ。そして、GDMの授業でこそ、子供たちのこの生ま生ましさにふれることが出来るのだ。この生ま生ましさを手放すまい。

(堺YMCA)

## VOICES FROM HIROSHIMA

迫田久美子

今年度も終わりに近づきますね。広島YMの場合、いかがですか、感想は？

今年の目標であったGDM研究会、機関紙発行が順調で一安心です。秋に行なった心理学や絵の研究会も、日常のGDMクラスに役立っている様で、好評でした。

春休みには何か計画がありますか？

日本におけるYMCAの英語教育の歴史をふり振り返りながら、『YMCAの英語教育を見つめ直す』というテーマで研究会を持つと思っています。

広島YではGDMの歴史は長いんですか？

8年位です。2～3年前からは、中学生もGDMをとり入れ、小4～中2までの一貫教育です。学年と経験年数でクラス分けしてありますので、場合によっては小6と中1が一緒のクラス…という事もあるんですよ。

先生も大変ですね。色々勉強しなくっちゃ。

ええ、月一回の講習会、月一回の研究会(item研究)週一回のSpeech Clinic、各講師に原稿依頼して発行する機関紙『風のささやき』等が定期的な活動で、春と秋には長期研究会を計画します。

ところで、もう来年度のプランはもう決まりましたか？

まだ検討中ですが、問題点として、研究会がどうしても技術面の追究に終わってしまうので、講師の英語力向上という意味で『講師のrefreshment』という事に重点をおきたいと考えています。

具体的には？

Speech Clinicや『風のささやき』は従来通りに行ない、研究会の内容を、itemの

trainingでなく、a) Basic Englishの背景やwordsの研究、b) 意味論の研究、c) 中学生の教科書のwords・gradingの研究、d) 小1～小4までのGDM前段階における教授内容の研究等、あれこれ案を出している所です。

要するに、もっと原点に戻ってGDMを見つめようという事です。

又、教えるばかりでなく、子供達がGDMでどの様に学習していくか、一貫教育をしていく上での追跡調査も必要だと思います。具体的にどの様にしていくかは、まだ問題ですが。

それは重要な点ですね。頑張ってください。

ところで、呉YWの活動はどんな状況ですか。講師会を月2回もっていますが、やはり広島YMと同じ様な問題点があり、来年度は次の様な方針をたててとり組もうと考えています。そのIは、『講師の基本的な英語力を高める』、そのIIは『教育を考える』という事で、子供との対話を重視し、おちこぼれの問題をとりあげたいと思います。

子供の扱いの問題も、追跡調査と同様、大切ですね。

そうです。どうしてもGDMが現場の中学の英語と違いますので、だんだん生徒が減っている様です。小学生の場合、家庭との距離も問題になります。そこで来年度から遠方の子供達の分校ができるんですよ。ヘエー、それはいい。出張GDMですね。

ええ、団地の子供達が殆んどです。来年度も子供達に負けずに私達もガンバラナクテハ。

我々も、広島勢に負けずにガンバラナクテハノ

## 御殿場に於ける GDM の セミナーに参加した者のつぶやき

黒鳥 佳臣

私は現在、小中高生の為の英語教室をやっております。中高生はどうしても受験ということの為、学校の授業の補習的なやり方です。小学生に対しましては GDM “的” にやっております。敢えて “的” と記しますのは、私が十分にまだ GDM を習得していないのですが、昨夏のセミナーで初めて GDM を学んだことの中から出来る範囲でそれを取り入れてやるという意味におきまして GDM 的と記しました。

今から数年前になりますが、M 先輩との雑談の折彼がふと「日本の「英語学習」には“場”がないことが大きな問題だ」と話したことをよく思い出します。実際現場にあって考えさせられ又大きな課題でもありました。

昨春たまたま、お茶の水での根古谷先生の実演授業にて、初めて GDM による教授法を知る機会を得ました。初めての私はその内容の素晴らしさをこゝで改めて記すこともないと思いますが situation の中から英語を自分のことばとして発する子供達にただ驚くばかりでした。“SEN-SIT” に強く印象付けられました。とにかくこのことにより昨夏の御殿

場でのセミナーに参加した次第であります。御殿場での四泊五日。多くの収穫を得ました。というよりも多くの反省を与えられたと言った方が妥当かもしれません。反省の一つは、「situation の中から…」と私は簡単に思い言っていたのですが、それは決して「作ったもの」「仮説のもの」「遊び」というものでなく教室、教師、生徒それ自体がすでに重要な Situation になっているということでもあります。

反省の二点。諸先生方、諸先輩の授業をみて強く感じますことは「周到に準備されている」ということです。これは決して、前の日に机に向って何かを練るということではなく、GDM でやるということは、日々の教師の生

活が準備であり、すでに授業の一端になっていることに気付かされました。吉沢先生の言われたことを思い出します。「あなたは教えることがうれしいかどうか?」

普通、講習会なり、セミナーと申しますと

何となく理論、理屈で終始することが多いかと思いますが、昨夏の GDM のセミナーでは全く経験のないものが、実際にクラスの前に出て授業をするもので、全く戸惑いました。私の「つぶやき」はそれへの不満でなく、反省から、それを GDM で実践することへの、「つぶやき」であります。

### Summer Seminar

トキ：1977年8月19日(金)～23日(火)

4泊5日

トコロ：日本YMCA同盟 「東山荘」  
申込み先：大阪ZMCA英語学校「GDM  
セミナー係」〒550 大阪市西区  
土佐堀2-12

一般クラスの他に Advanced class もつくる予定にしています。

### 第7回 公開講演会(関西支部主催)

とき：1977年6月4日(土)午後3時～5時

ところ：朝日新聞社ビル(大阪)

やること：体験授業 フランス語 指導 梶川 忠  
体験授業 英語 指導 吉沢 美穂  
質疑応答 司会 小高 一夫

マスコミ関係では学習塾や学校教育のあり方を盛んにとりあげている。GDM で教えているわれわれにとって、ゲンテンに返って考えるいい機会である。

(根古谷・甕川)